

平成20年度「立ち上がる農山漁村」選定事例概要書

◎取組分野：【食】【交流】

1. 都道府県、市町村 千葉県鋸南町^{きよなんまち}
2. 団体名 鋸南町保田漁業協同組合^{ほた}
3. 取組みの名称 保田漁協都市と漁村のふれあい構想^{ほた}
4. 取組概要等

◇概要

保田漁業協同組合ではかつてヒラメの養殖を行っていた。しかし、下請け事業のため経営に行き詰まった経験があり、組合独自の直接販売システムを構築することとした。その中で、「自分たちは魚のことを誰よりもよく知っている」という最大の強みを活かし、それを直接消費者に伝えたいという思いから活動が始まった。

平成7年7月、当初は組合員の福利厚生を目的に「食堂ばんや」をオープンした。最初は廃材を利用した中古のコンテナハウス2棟からスタートした。当時の漁業を取り巻く環境は高齢化、後継者不足、資源の減少、魚価の低迷など多くの問題を抱える厳しい状況にあり、今後、販売手数料だけでは組合の経営は困難になるだろうということから、海洋レクリエーションに着目して、人を相手にした第3次産業「海業」を始めた。

平成11年には千葉県の特認事業により「魚食普及食堂第2ばんや」をオープンし、収容人数も210名と施設整備を図り、同年9月、行政と連携してプレジャーボートの受け入れを開始、平成14年3月には「第1ばんや（食堂ばんや：収容人数132名）」をリニューアルオープンした。この時点で来客数は2万人から20万人に増え、さらに平成15年12月に憩いの家（通称：ばんやの湯）をオープンして来客数は40万人と急激に増加した。

今ではこの魚食普及食堂の効果は「付加価値の向上」「地域の雇用増大」「流通コストの縮減」など漁業経営の安定化に貢献しているほか、利益の一部を「資源の放流」や「燃油高対策」など漁業者に還元している。

さらに地域の活性化を図るため、地元と連携して観光名所である江月水仙ロードに桃やアジサイ、ツツジなどの花木を植栽し、観光期間の延長に取り組むなど、来訪者は45万人を超えるまでになった。平成20年には地域観光資源を見直すために、国の支援を受けて観光バスの受け入れ施設として「第3ばんや」をオープンした。その他、観光拠点への無料循環バスの運行や、平成18年には「海の駅」として東日本「海の駅」設置推進会議に登録されたほか、観光遊覧船など家族で安心して遊べる施設づくり、地域活性化の先進地として多くの視察を受け入れ、地域間での意見交換を積極的に行っている。

◇活動の規模

項目	H15	H16	H17	H18	H19
生産量	1,873	2,267	1,952	3,035	2,190
解説	単位：ト 刺網や定置網漁が盛んであり、さば、ぶり、かつおなどが主				
売り上げ	597,436	614,116	618,256	636,687	
解説	単位：千円 料理メニューの開発や接客指導などで売り上げは伸びている				
来客数	397,709	418,619	430,000	451,546	
解説	単位：人 無料循環バスの運行、地域と連携した活動などで順調に増加				
雇用者数	80	103	95	98	97
解説	単位：人 地元を中心に雇用を推進				

◇活用している地域資源

活用している資源は、地元の水揚げされた新鮮な魚介類。これを刺身、煮物、揚物（天ぷら・唐揚）、寿司と地の漁師料理が味わえるよう5つの調理法で提供し、約100のメニューに仕立てている。新鮮な魚を使っているため、品切れ御免となる場合もあるほか、その時の魚価によってメニューの相場が変動する仕組みとしている。

◇地域活性化のポイント

地元の水揚げされた鮮魚について約3倍の付加価値を付けることを実現化したことや、ロットがまとまらない（単位量に満たない）水産物も調理して直接消費することで販売を可能にし資源の無駄が無くなるなど、漁業経営、漁業者の所得向上の面でも利点が多い。また、高齢者を抱えた漁師の世帯に配食サービスを行うことで漁師が安心して操業できるように努めるなど漁業者への福利厚生を推進している。今後は、漁業高齢者や漁師を引退した人たちが育った漁村で生活ができるような取組を進めていくこととしている。

また、地域交流の効果として町内の雇用機会が増えたほか、プレジャーボートのビジター利用が増加したことで地域全体に効果を波及させている。今後は日帰り観光から滞在型への転換を図り、民宿などにも効果を持たせることとしている。

◇事業の今後の展開方向

今後の展望として、地域ぐるみの活性化に取り組むためには、従来の漁港のみではなく、漁港と地域の活性化を一体的に捕らえる必要がある。そこで、保田漁港の持つポテンシャル（①豊かな景観②陸路・海路とも都心からの良好なアクセス③東京湾海底谷がもたらす良質な海洋資源・水環境）をふまえて、「保田漁協 都市と漁村のふれあい計画」を構想している。その構想は漁村の4つのゾーニング「海と幸ふれあいゾーン」「海浜レクリエーションゾーン」「体験学習型宿泊ゾーン」「里山体験ゾーン」により都市と漁村のふれあいを創出し、21世紀における漁村振興を、行政・地域住民との連携により積極的にする構想である。

そこで農山漁村活性化プロジェクト支援交付金を活用し、漁業者が所有しているが高齢化により枝打ちなどできない山林を「里山体験ゾーン」として整備していく。山の頂から漁村の景観を見せることで山と海との環境に対する認識を深め、樹木を植栽することで公園化を図ると同時に、漁村への防災に配慮する取組を実施する。

また、「体験学習型宿泊ゾーン」は、後継者の育成として小学生から大人まで体験できる操船体験や定置見学、水産高校などと連携して漁業体験などを取り入れていく。「海浜レクリエーションゾーン」では、親子で遊べる施設として釣堀やポートウォーク、プレジャーボート短期係留の受け入れを行い、若年層への就業の場を提供するほか、新たにスキューバダイビングなどのルール作りなどを研究し、都市と漁村が共存することで活性化を推進できればと考えている。さらに、「海と幸ふれあいゾーン」では、魚食普及の推進や漁業者の福利厚生を継続して行っていく。

